

[Memorabilia]

—Pethau Cofiadwy mewn Astudiaethau Cymreig—

Rhif 8: 水谷 宏「書き言葉」と「話し言葉」について

カムライグ語について音声学的な立場や言語学的な立場から研究しようとする場合は当然のこと、一学習者としてこの言語を習得しようとする場合にも、「文章カムライグ語」Cymraeg Llenyddol / Literary Welsh と、「日常会話カムライグ語」Cymraeg Llafar / Colloquial Welsh との区別は重要であり、この両者を混同すると、予期しない誤解が生じることになりかねない。カムライグ語に限らず、その他の言語においても、この両者の間の「境界」を求めることは困難であるが、ごく一般的に言って、「丁寧さ」の度合い（筆者自身は、「文法の拘束性の度合い」として観察することになっている）が、「よりくだけた」方向に向うと、前者「文章語」は、後者の「日常会話語」に近づき、反対に、後者は、「より丁寧」な方向に向うと、前者に近づく、という見方が、社会言語学的な立場からの現在の学問的水準であろう。自分の使用人に話しかけるイングラント人の地主を例に挙げて、カムライグ語が第一言語ではない、我々のような、所謂「学習者」dysgwyrの人たちが、「文章カムライグ語」で話しかけると、親

しみどころか、変に「気取り過ぎ」と感じられたり、反対に、あまりにもくだけすぎた「日常会話カムライグ語」を使うと、「嘲笑」の対象にされてしまう、という趣旨の発言もある (Syr John Rhŷs (1896) 'Language Conditions: Welsh and English', *Royal Commission on Land in Wales and Monmouthshire Report*, p. 81.). また、「日常会話カムライグ語」の使用については、「日曜日カムライグ語」との呼称を使って、市井の人々の使う「ことば」と区別して、日曜日の教会での説教のときに牧師が話すカムライグ語に言及している例 (Syr Ifor Williams (1945) "Cymraeg llwyfan" *Meddwn i*, t. 52.) もある。因みに、'llwyfan' とは「演壇、説教壇、教壇」のことであり、この種の変種は、牧師の説教に用いられる変種だけではなく、より一般的には、講演、講義等々に用いられる「改まった」口語の使用が含まれると解釈していい。つまり、「日曜日カムライグ語」と呼ばれる「演壇カムライグ語」というのは、「日常会話カムライグ語」に比べると、「文章語」に近い「より丁寧な」変種であるが、文字に書いて提示されるのではなく、あくまでも、「口頭」で表現されている限りでは、「文章カムライグ語」とも区別されるべき変種なのである。ただ、「丁寧さ」の度合いが極めて「高く」、従って、限りなく「文章語」に近づいている変種であると理解していいであろう。また、このような変種が特定化されるカムライグ語の事情というのは、「併合法」(1536年)以後、カムリの国におけるカムライグ語の使用が、家庭内と教会とに制限されたという歴史的事実にも関係していると考えて差し支えないのではなかろうか。

そのような史的背景の中で、とにかく、カムライグ語の使用においては、「文章語」と「日常会話」の違いの大きさが、しばしば、いろいろな人々によって指摘されてきた。そして、学習の場においても、「文章カムライグ語で書き、日常会話カムライグ語で話すこと」が、他の言語の学習の場合以上に強調されているのである。そのもっとも早い例は、A.S.D. Smith (Caradar), n.d. (c. 1925), *Welsh Made Easy*, Parts I & II, Wrexham: Hughes and Son. である。本誌の **研究紹介** で紹介を試みようと思ったが、研究というよりは、極めてユニークな語学書であり、今回、この欄で紹介しようと思う。

小冊子であることにも拠るのかもしれないが、出版年代は (n.d.) ながら、著者による序文の終わりに、August 24, 1925 とあるので、(c. 1925) としておいた。同書のユニークさの第一は、カムライグ語に限らず、ほとんどの言語の研究や学習の手引きにおいても、ラテン語文法とその影響を強く受けていた英語文法の桎梏の下に、その対象は、「日常会話」に用いられている変種ではなく、「文章語」が中心であった時代 (言語研究、言語学習の「古典語主義時代」とでも名付けていいだろうか) にあって、カラダール著「易しいカムライグ語」